武家名目抄稿 職名部附錄九 九

和書門
類 二五二〇六 號
函 七七 一一 架
冊 四五九 四五六

内閣文庫
和書
類 二五二〇六 號
冊 四五六 函 五三 一一 架

内閣文庫
番號 和 25206
冊數 457 (71)
函號 153 275

国立公文書館
National Archives of Japan

武家名目抄稿第九冊

職名部附録九目録

馬廻組頭
馬廻組
小馬廻
小性組番頭
小性組頭
小性組

国立公文書館
National Archives of Japan

大小性組頭
大小性組
中小性頭
奥小性
中小性
小十人頭
小十人
歩小性

武家名目抄稿第

職名部附録

馬廻組頭

末森記云杉江彦四郎ト云兵成政内馬廻組頭ヲシテ勇士成カ近辺ノ城ニ番勢ニ居タリシカ鳥越ヲ加州勢候ヲ見付助来ル處ニ利家卿内ニ九里少小藏ト云小性其頃蒙勘當居タリケルカスハタヲニテ彼彦

四郎ニ渡合引ノシテ谷ヘ落云々

清須分限帳云御馬廻頭千石松井六左衛門千石伊奈左門同寺田藤左衛門 組持 同加藤太郎右衛門同阿部長七郎同奥平八郎左衛門二千石大道寺玄蕃四千石富永孫

平組持

五、廿九ウ

右関記云 陽田ニ七騎ヲ 秀吉 粉 傳 天正十九年四月十九日 ヲ 傳 小性馬。巳。手組頭ニ柳瀬ヨリ大利ヲ

降ル事出来ル ニ出ル

兵粮ノ ヲ ヲ 出ル ヲ 命ル ヲ 解 ル

又云 名護屋御留 ヲ 生駒 方 條 ニ

番石川組石川組伊奈上野方迄 ヲ 廿 人

略 ヲ 番長谷川次郎兵衛

馬下 少次郎 下廿 人 四番 四番桑原次右衛門 杉

若蘇次郎 下十七 人 右番中井組中井正兵衛

匂坂長兵衛 下廿 人 ヲ 番堀田組堀田図書助

以係長組 古浦（下廿九人畧） 本九度間に番兵を通
組一番伊藤組 伊藤丑後守 浜田藩士 鄭府
（下廿七人畧） 二番河井組 河井九郎兵衛 浜田藩
九郎（下廿二人畧） 三番真野組 真野義人 赤松
次郎左衛門（下廿七人畧） 四番佐藤組 佐藤隆次郎
伊丹兵庫組（下廿七人畧） 五番長谷組 長谷川鄭
左衛門 春日九兵衛 鄭（下廿七人畧） 六番速水組
速水甲斐守 佐藤孫十郎（下廿五人畧） 右一日一拠

宛世物意可申和仕方也 七月廿二日 御番所
又云 加藤主計殿 二部表 八幡 金山 云所に地利宜
小倉より長崎警衛加藤左衛門
同組兵勢六千 通り頭二人 拾合五千人
兼橋中と云場より九鬼四郎兵衛殿
郡左衛門 山田甚三郎 兵勢三千 義豆
計殿 感状道 書を入
長州記云 真野義人 八道家伝 中島丑郎 浦

二人ハ馬ヨリ出ル馬ヨリの組ハ
のとくもあり律第一編ハ
惜しんを時事に南面して切腹しり
野村伊与ハ原田図書ハ馬ヨリ北
ハ南表ハ鉄砲ひ腹れ頭ハ
に出かりれ本ハと二のハ北ヨリて
切腹ス

馬廻組

下、サウ
梅松論ニ云ハ楠ハ兵庫ハ陣ハ頃ハ人
大伴の勢力ハ強ク戦ハ若合戦利
あらハ馬ヨリ北武者ハ名具ニ入ル
退治ハ我ハ命一
曽我物語ニ 時の勢ハ 北条ハ一人たり
せんのつとハ六七百人ハ寄のまとみ
えしハ中ハこの中ハ二ハ出られたえ
ハ太郎ハ

国立公文書館
National Archives of Japan

[illegible]

太平記云（矢刻闘條）義貞ハ兼テヨリ馬廻ニ勝レタル兵ヲ七千余騎圍マセテ栗生篠塚名張八郎トテ天下ニ名ヲ得タル大力ヲ真先ニ進マセハ尺余ノ金棒ニ畳楯ノ廣厚キヲ突雙ヘ云々

又云（尾張小河東池田條）佐々木大夫判官入道ニ告田黒田二部（ニヘ）鈴村大原馬杉ヲ始トシテ宗徒ノ兵ヲ馬回ニ扣ヘサセテ敵ノ真中ヲ破レト扣ヘタリ

明徳（サウ）記云去程ニ山名播磨守満幸出雲伯耆隠岐丹波（後）四ヶ國ノ勢一千二百余騎皆崔ノ森ニ魚鱗ニ進虎轉ニ開テ一足モ退

ソカス一千ノ中ニ万卒ノ死ヲ軽クセヨ
ト進メテ罄タリ御所様モ御馬廻三千余
騎ニテ中御門大宮ヘ打テ出サセ給テ東
西ノ責口ニ難儀ナラム方ヲ御合力有ヘ
シトテ御旗ヲ進メ罄サセ給フ
又云（上、高ウ）御所ハ廿六日ノ辰ノ尅ニ一色ノ左
京大夫ノ亭中ノ御門堀川ノ宿所ヘ御出
成ル家僕ノ御退治ノ御出ナレハ御着長
ヲモメサレス御烏帽子ニ長絹ノ御直垂
ヲ召レ篠作ト云御太刀ヲソ着シ給タリ
ケレハ御馬廻モ皆々折烏帽子ニスワウ
袴ナリケリ其外ノ諸軍勢ハ皆ヒタ甲ニ
テ一勢々々打出内野ニ陣ヲソ取リケル」
又云（上、ヨウ）山名上總介ハワト走リ通テ中御門
大宮マテ御所ノ御陣ヘカケ入ラレト見
廻シケル處ニ攝津左馬助富永筑後守ヒ

左近將監御馬廻ノ入二十四五騎カ程下
立テ大宮面ノ古築地ヶシヤウ文壇ヨリ
走リ下リ大路ヲ塞テ支ヘタリ
應永記云同八日御所様相公モ東大寺ニ被ㇾ居ㇾ
陣ケリ御馬廻二十余騎御伴ノ人々ニハ
管領子息尾張守前管領同子息左衛門佐
ヲ始トシテ已上其勢三万餘騎同十四日
八幡ニ御陣ヲ被ㇾ居ケル

鎌倉大草紙云應永二十二年十月四日東
明寺殿伊勢ヲ発向中略同日
新市堂宝寿院ヨリ打立給ル馬廻一手餘
旅若宮少弐ヨ陣ヲ居ル
又云應永廿二年十二月四日新市堂宝寿院
寿院ヨリ打立給ル馬廻一手餘騎若宮小
路ヨ陣ヲ居ル
新撰長録寛正記云頃而政長御幡ヲ被ㇾ出

御馬廻荒手ノ兵ヲ引卒シテ切テ出ケル

新撰應仁記云（一せいウ）義就政長闘乱條去程ニ花御所ヘ

ハ細川方ヨリ寄来ルト日番夜番廻隙モ

ナシ細川方ニハ御所ヨリ打テ面々ニ手

分ヲス勝元ノ方ヘ馳集ル大名ニハ吉良

右兵衛佐義直同上総介義富（中畧）此人々屋

形ノ内ニハシトミ遣戸ヲ取拂上土門ヲ

押開テ勝元ノ猶子六郎殿ヲ大将ト仰テ

庭上ニハ一門他家ノ人々并ニ馬廻ノ衆

甲ヲ耀シ鎧ノ袖ヲ上リ合稲麻竹葦ノ如

ク打圍テ五六千靡居タリ

細川勝元記云（ナセウ）細川方ニハ御所ヨリ射手

向フトテ手分ヲシ口々ヲ堅ム（中畧）屋形ノ

内ニハ鄙遣戸ヲ取拂ヒ上ケ土門ヲ押開

キ猶子六郎ヲ大将ト定メ庭上ニハ一門

他家ノ人々并馬廻ノ衆甲ノ星ヲ耀シ鎧

ノ袖ヲ汰合ヲ並居タル凡五千計リ見ヘ
シ

細川家記ニ香西元ヲ判紙宗好方ヨリ強
ル事思ヒヨラレス且カヤウニ成リタル者有ヒ
関ヲキル有リ四十月ヲ旬ヨリ波多野ハ毋波
矢上ヲ堀ヘ負テ立ル柳本ハ因國ヲ男ヲ
枝蓋也道永ハ関ヲ口ヲキウツリ奴ヲ
急退治ヲクヘキトテ四十月十三日ヨリ軍大

将ヲ典厩尹頭トシテ細藤源四郎慶恒民部丞
高良俊弾正亮師方ヲ郎左衛門四郎波多野伯
耆守摩田ヲ郎左衛門若狭ヲ荒井馬廻
ハ十余騎丹波ヘ打下ル
江州記ニ四月八年七月十八日櫻山寺殿
自悔(海)波州ヘ出張ル上坂ノ部陸奥方ヲ案ヲ對
所本ヲ三ヲ也所供中人ヲ也丹口城ヲ波
見狩野ヲ外ノ馬廻也

赤松紀氏永正十八年正月廿日著陣廿四日
張陸廿五日先勢弘岡殿を大將として廿六日迴
里北荒井より大田の城へ出陣
又云 浦上与郎左衛門尉内藤四郎兵衛尉両人先の
日より屋崎へ陣所取合申候 北
の方勢破竹の如く敵寄て成帰
るとて赤の旗下知をうち出
則馬廻り荒田四郎右衛門尉 今武庫川
河原まで出陣
二 水記云 大永七年二月十三日早旦於桂
川之邊有合戦武田衆數輩打死了二番合
戦道永馬廻衆又敗北云々
又云 大永七年十月十三日今日御出張一
定也朱明東山所々焼篝了早旦於二条邊
見物薬師寺九郎左衛門尉同与二等上其
勢數百人也食後又於河崎天神邊見物也

右馬頭以下馬廻之衆等都合二千人許欣
又云享禄三年七月十四日早朝窪人今日
出張同堀東雲其外馬廻之衆出張
蜷川親俊記云天文八年七月十四日之間従
京都之好神五郎其外地多野馬廻荒姉小路
西京出張打之自山崎之好伊勢守向大明神
之西井川金乗寺出陣之柳本之畠十郎
岩神社祇宮出打之敗日野伏之之方方
及敗北之
蜷川記云京人一揆中之松の事之方
称之面々方諸侯の荒山之事之日笠
八幡小者之京宮修へ方面修之
小者之中日笠八馬廻り荒之中山馬と
之因為也
義輝将軍御成記云京兆馬廻衆道正湯漬
御看進候頭殿衆モ跡ニヲ同前ニ進候也

簡禮記云三職四職ノ内馬廻エノ事大概
同前タルヘシ但進之候ト書事相當タル
ヘキナリ
小原古代記云 氏庫ト 上杉 家来 憲政馬回 難波
田禅正入道小野田幡内 与方稲ヘ条俗言
山田京所ハ従膳云 御馬回 新内 給之
帳 山田四郎左衛門 砂糖五百文 陸奥 地
田源四郎文湯 島百四拾四文 中郡 山本 拾四
文 陸奥 南部 青海以上砂糖五百文内百四拾四文
前ノ方参 残ハ拾四文 陸奥 役 以下書之
由良宗傳記云 義氏善久 意見条 小性 馬回
付ル ヨ 仕ル 所ニ 弓ノ 器用不 器用ヲ
鉄ノ 砲ノ 所ニ 弓ヲ 身ノ 多ク 若ク 性ハ 大ニ 病
ヲ 百ヲ 作付 所ヲ 市ノ 中ハ 下ニ 所ヲ 出ル
其外何ヲ 何役人ヲ ヲ 吹ヲ 可ヲ 作付
蒲生氏郷記云兼テノ武者ノ暇々一番蒲

生源左衛門蒲生忠右衛門二番蒲生四郎
兵衛町野新三郎三番五手組六手組七手
組四番寄組其次ニ鉄炮ノ頭扨旗本馬廻
組小性頭組跡備ハ関忠五郎何モ備押ヲシ
太鞍如此候シテ正宗虚病ニ付テ五手六
手七手三與ヲ跡備ニ置関ヲ三與ノ跡得
入替ラル

信長記云姉川合戦条 三 國中ノ仕置被仰出七月
六日馬廻小性計ニテ御上洛有テ室町殿
ヘ今度合戦ノ次第委仰上ラレ飯國ニ趣
給ケリ

又云惟任日向守謀叛条 馬廻ニハ大塚又一郎平尾
平助針阿彌鉾ヲ双ヘ切テ出テコミ入レ
ハ追出シ爰ヲ先途ト戦ヘハ且ハ寄手辟易
ノ見ヘケル

新撰信長記云信長御与織田十左衛門尉不和条 數千騎

之勢ヲ卒し犬山表ヘ發向し玉ヲ大山ニ
モ此由兼テ聞勢ヲ圓メ相待處ニ信長卿
ノ御馬廻之若武者ハ二千騎計ニテ押掛
タリ
末森記云不破彦三多野村三郎四郎比山
内膳岡島喜三郎原隱岐武部助十郎ナト
ヲ先手ノ大將トシテ其外宗徒ノ軍士共
急々打立候ヘト觸サセ其儘カイヲ立サ
セ利家御出サセ給フ心懸ノ小性馬廻五
六十騎御供ニテ先小原ロト云所マテイ
ワカレケル
惟任征伐記云信忠譲(繞)五百計ニ(まで)二條御所
(信長)將軍御馬廻被隅惟任殘黨馳(駝)加二條御所
者一千餘騎
柴田退治記云秀吉聞之早速走向江北先
手之備定殷々一番羽柴久右衛門督秀政

中
畧十三番中川瀬兵衛尉清秀此次秀吉馬廻也先手鉄炮衆以上八首右手疵近之歴々也左手小性衆究竟之勇者也

八十九ウ
古閑記云 山崎の首初めの 天正十九年六月 傍輩 小性馬廻 急 卷 急報条

城を攻め手を分ける小性十人計傍輩ニ十人ばかりの

又云 也伊勢衆 進発条 秀吉小性馬廻 方 御鉄炮一万五千

到 ニ差副ル 四月廿三日河内へ差陣

又云 和泉国内進發 人数帳条 御馬回 百四十ニ百人

市橋宗左衛門 組ニ百人 小性百人 組百人 室町

後ハ百人市橋左手五百人 本下ハ 鉄炮七百

百人市橋右手ニ百人 市橋清左衛門 百五十

人 師 弾正手百人中間以下合一万四千余人

清須分限帳云 大道寺玄蕃 組御馬廻八百

石磯野喜三郎（余二十人畧之）松井六左衛門組御廻千石守田彌右衛門（余二十四人畧）伊奈左衛門組御馬廻五百石三宅次左衛門（余二十二人畧）加藤宇右衛門組御馬廻三百石林喜右衛門（余二十一人畧）奥平八郎左衛門組御馬廻二百石盛川長左衛門（余十五人畧）阿部長七郎組御馬廻三百五十石山本五郎兵衛（余十二人畧）

其頃右関ヶ原軍書ニ一旦奥ヶ者共人持ニ而

一二万石ヲ廻シ内ヘ動万石可借ル金ヲ外

仰合可ニ借ル事

摂州家文書ニ云 御ヶ様ヶ格ヲ以家ヲ馬廻

雖戦ヒ共利ヲ以ヶ世ヶ如ク也 当兵法ヲ士卒

ヲ過刷ル 未戦ヲ成 依而ヶ廻ヶ徒ヲ其ヲ所ヲ相ヲ

ヶ間ヶ地ヶ馬ヲ打ヶ様ヶ多ヶ相ヶ見ヶ成 持ヶ越ヶ者ヶ成

大利ヲ

又ヲ秀吉ヲ小早川左衛門佐ヲ頼ヲ状ヲ案ヲ田

候間ニ山崎ニ秀吉馬廻計ニ而三方
能登之所之御手始ニ而鉄炮ニ而柴田殿
於当方悴之時ハ後ニ及無備付者ニ
之衆之度之様鉄人々殊ニ敵国ニ押ニ而刻ニ
来之刻止切右左之互之様を打数見を休ニ
了膳頃不存見候事

奥羽永慶軍記云大閤洛陽出陣名護屋御動坐條秀吉公
三月洛陽ヲ打立玉フ中略御馬廻ニハ容儀

帯佩スツレタル若者三百余騎云々
安土日記云永禄十二年信長御陣所御番
之事御馬廻御小性衆弓鉄炮衆九月八日
稲葉伊豫池田勝三郎丹羽五郎左衛門両
三人西搦手ノ口ヨリ夜攻ニ可仕旨被仰
出候
又云天正十年五月十九日丹波猿楽梅若
太夫ニ能ヲサセ家康卿御伴衆今度道中

辛労ヲ忘申様ニ見物サセ可被申旨上意
ニテ御桟敷ノ内穴山梅雪長雲友閑夕庵
等御芝居ハ御小性衆御馬廻御年寄衆
籾井日記云（信長卿秀治宗貞工御對面糸）國中御留守ノ
一式ハ大將宗長公ニ荒木兵部太輔殿加
ハリテ御下知アラレテ候摂州ヘ御供奉
ノ人々ハ大將分物司老中家ノ歴々ニハ
渡辺大学綱俊（中略）宗徒ノ人々トシテ御馬
廻遊軍衆三百七十騎御軍勢五千五百余
騎ハ御本備ナリ
（五）御義書ニ云堺ニ出張ノ御馬合
赤阪ヘ出ル時ハ出ル手柄ニ重ル後ニ石
ヲ引ク殊ニ方ハ高ク成ル故ニ不無ク
金吾中納言義秋ヘ百出ル義秋御出去の
後摩限の義（ホノヲ）度ニ悪ク出ル義度
時出去ヘ國ヲ乗ツ宰人ヘテ福島ヘ行ル

[illegible]馬[illegible]を勒[illegible]

松隣夜話云越後ノ八龍四角ト云ヘ十二人ノ荒勝負ヲ得方ニスル者直江市兵衛稱津ニ右衛門佐桐三介瀬場四助勝尾五郎丸田井六郎志賀肥前石里藤藏九雲十兵衛苦桃弥吉志村新助音竟寺ナト是等ハ小身者謙信馬廻リニ在テ鬼ヲ酢ニヒタサテ喰レトスル如原ニテニテ候

義直卿雅楽助賛云馬興元山下[illegible]郎奥州[illegible]郎[illegible]

乃ち人畧之

當代記云永禄十二年八月廿日伊勢國ヘ信長出馬アリ浅香城令悃望間城ヲ被請取廿八日大河内被取ニ詰此城國司父子被籠畧ニ此信長馬廻ノ中戦功ノ衆廿人毋衣衆被定佐々内藏介毛利新左衛門河尻

肥前守（与兵衛事）生駒勝介永野帯刀左衛門津田左馬介蜂屋兵庫頭中川八郎右衛門中島主水松岡九郎次郎是黒縄ノ衆也織田越前守前田又左衛門飯尾隠岐守福富平左衛門原田備中守（塙九郎左衛門事）黒田次右衛門毛利河内守野々村三十郎猪子内匠介此九人赤縄也

又云元亀元年九月廿五日信長叡山ノ麓ヘ押寄香取屋敷ニ人數被置志賀宇佐両城ニ馬廻衆陣取

又云天正九年辛巳正月元日御馬廻ノ衆出仕自西門東門工可通可有御覽ト也（諸大名ハ近年致長陣ノ間於其所可令越年由信長依下知也）然而未明ヨリ申ノ尅迫不引切罷通

又云天正十五年三月朔日秀吉公九州御進發ノ砌諸士出陣日限人數積ノ事（中略）三

月一日関白殿御馬廻衆御小性衆云々

又云慶長十年二月廿四日右大將立江戸

上洛具行粧（甲略）馬乗奉行同歩行者并小者

永田善左衛門永井弥右衛馬廻鉄炮奉行

石川八左衛門永田正左衛門云々

天正記云（一九ウ）　こまもの衆ハ信忠ワツラフ百ハカリ二

番ノ内ヲ人ハ軍ハ馬廻ニ成ル　ハ足

軽ハ馬廻ニ成ル四五百人ハ

又云（七八オ）　彩色国印丹後

人数ハ馬廻ハ

西方ハ子ハ百人ハ

天正事録云御花見ノ次第御催影シキ様

躰也上ノ醍醐ヨリ下ノ醍醐ノ間五十町

四方山々廿三所也弓鉄炮槍兵見手々ノ

幕ヲ打伏見ヨリ下ノ醍醐迄小性衆御馬

廻警固也

下、四十二オ
大友記云 田原新貫 最後條 最ノ木イ 天正十九 新貫遺恨ヲフクミテ
城郭ヲカマヘ楯篭ルコレニヨツテ退治
トシテ宗像掃部統運大鶴河内守鎮増ヲ
大將トシテ御馬廻ノサフラヒ二百余騎
都合二千余騎セシフカタヲノコナタニ
陣ヲトル

四十八ウ 天正十五年
蒲生氏郷記云 蒲生源左衛門寺井半左衛
門々屋助右衛門岡左内一二ヲアラソイ
飛入残ル兵我モ々ト押破懸入二ノ丸
ヲ乗取関白様被御覧ハヤ城ハヨツルソ
シタ々ト御感不斜メ此羽織ヲ着テ本
丸ヘ乗候ヘト被成御諚薄浅黄ニ柳ヲ縫
タル紅梅裏ノ御羽織ヲ被下氏郷是ヲ項
戴有テ着用ノ馬廻小性モ不残本丸ヘ懸
レヤ々ト下知シテ我身モ侍共ノ云々

下、セニオ
伊達日記云 慶長元年太閤様伏見ノ向島

ト申處ニ御城御構候云々　同廿二日ニ小
幡山ヲ御覧被成御城ニ可被成由被仰出
候大名衆御馬廻り小身衆迄組々ヲ被成
極月晦日ヲ切ニ御移徒可被成由ニテ夜
ヲ日ニツイテ御普請イソキ申サレ候

慶長五年甲寅三月二日

慶長五年ニ大閤所移住馬廻衆
大方伊右衛門申候
大坂軍記ニ書ル〻ハ廉モの馬

閏七月

ヨ条能馬の爲ニ兼塞り申程不可成
空間ニテ申付ケと申ケレ大閤所ニさせ
給ハ申ケレ多ク爲ニ爲ニ馬申様
ニテ書ル〻方ニ馬廻り申付ケ
茶臼山ハ申ケレ城候
大坂口ニ空ニ空長二年ニ月中旬大閤移住
不例ニ付御世界秘方動ニ付思召ノ条
多成ニ付直ニ被仰付ケ増田右衛門尉石田治

新お補方傳兵衛殿御陣屋御番所御名東
方藤方補方五人御陣屋第一方名元御馬
見元間柄要勇仕候御指揮御者不可紙思召
以来中直ス段御仰付被可申渡旨
被仰付候ニ付方法伝元ハ不拘第渡旨
多神藤仕紀之飯田兵衛兵衛人数ハ寺内ハ
置山幡馬見ヶ方連方草氏新方矢倉之立
中山ハ押拙中山

元和年紀元二年六月十日芝浦辺ハ南元芝浦
京水と出西方馬亟野使者中書方馬元儀新
条ヶ方ハ得方ハ元ニ儀と少成ハ方ハ
可仕田中勇ヶ方ハ不拘方ハ思召ハ申ニ方ニ
方ヶ方ハ出馬廻元方出新後方ヶ芝元ハ
新仕候

拙方馬見紀方ハ人元方人の馬の傳方庵
仕方ヶ方馬の手伝方ヶ方ヶ紀方ハ出

馬に付る人をあらかじめ定置る事
相定る所中にて二番目を
つけられ馬に乗廻りとて職名有れ
ども家ごとに小性組に称する歟

小馬廻

鎌倉年中行事云公方様御發向事中略公方
様御跡に御皆元役以下供奉之人々不知
其數御馬廻ヲハ御中居殿原号御覚悟面
々御剱ヲカツキスワウ小袴ヒウシキ小
太刀一ツ元帯數多御供申ナリ
按ずるに中居殿とは内の衆より中
山性安月斎等也其外小馬廻とは
なり
長谷戒新元秋或同名衆中より新垂守右
衛門和泉科方ゑ原遠江守板倉其外科

中付事 今停止自然背輩於有之関白殿
方被為可申付事 併初了之後仕如此
為之仕 手柄可申事也 爾後小弓
廻回 為小可申付 猶慶長五以四月可為
事 有仕り力 初り年 至 紀 財 物 之 可申
事

播州佐用軍記云 秀吉卿嶋ニ宇喜多合戦条 秀吉ハ谷
大膳ヲ真先トシテ足軽五十人一枚楯ノ
侍添ニ行ニ押出タリ其次ハ谷カ馬廻ニ
歩行ノ兵百余人半ハ弓半ハ長刀鎗ヲ打
食タリ

多聞院日記云天正十九年八月八日東林
院ハ今京ヨリ信長若君孫殿 髄 宿寺ヘ移関
白殿 然儒僧ヨリ用丸事 孔 如 或也 別髪ヲ切給
ヲ大名ハ馬廻 衆 皆ヲ 盛 ヲ 西者 必 衰 佛 従 眼
前ニ

一當代記云慶長十七壬寅正月大納言へ於
関東中廿万石被渡此内二三万石不足之
由也則小性并小馬廻以下不残大納言公
ヨリ配當
十又云慶長十九年正月二日去年ノ冬ヨリ
大御所小馬廻并番衆不残江戸へ被召寄
人不審ノ思ヲ成
拙小馬廻ト
多くひとを為へくふこてきこと四
小性組番頭
小性組組頭
右関記云 佐々内蔵助 佐々内蔵助成政 佐々内蔵助成政雄
御小姓方ヲ選 組中ヲ義長ヲ選
義長御家ヲ仕新参ニ五十二年来日高
深雪をもいとはす
山路をとり迷ひ仍て者五六人かよひ

力士性十人計ハ郡内をめせ時年七和
世代ハ無り稽古ハ常常有中にてらく
を年一ヶ年真忠心中を丹誠行ス
や男しの外ハ中ハと薩州里より若ハ高
拙夫勝ハ清一人岡のつまハ行ハと名富
しあへて小性ハ長建新亮度ハと云者
いやしよ鍋中より信和深高思ハ少すへて
方々家をかまいを道ハ案内をれせよ
海字心中ハ行ハ和ハと云
しのハたれハいしんとよてけり
ハ
増補家忠日記云慶長十七年十二月大久
保主膳正幸信ヲ小性組ノ頭トナサル
江城年部云寛永三年三月十一日所役者
ヲ作付ハ小性組ハ組頭七ヲ枝番四
郎右年寄ハ慶ハ年十二月十四日古田重安ハ阿部

山縣ヶ可原駿迫ヶ[illegible]上一時中附紀番所ヶ付
十年八月五日戸田法印ヶ於ル甲斐ヶ出
少性組書紀ヶ付ヶ[illegible]ヶ付
性組ヶ付ヶ付

小性組

蒲生氏郷記云天正十二年九月十五日ノ夜木造内ニ
テ物頭ヲシロヲモ聞程ノ兵ヲ不残氏郷
領分曽原ヘト申表ヘ押出中略氏郷真先ヲ
カケラル〻馬達者也馬ハイチモツナリ四
角八面ニ掛リ破リ突倒シテハ駈廻リ
果チラシ果返シ戦ルシ具内ニ外池長吉
黒川西田中新平ナト云者散々ニ戦討
死スト小性立ニ外池孫左衛門氏郷ノ矢面
ニ立フサカリ防戦云々
又云兼テノ武者ノ殿多一番蒲生源左衛
門蒲生忠右衛門二番蒲生四郎兵衛町野

新三郎三番五手組六手組七手組四番寄
組其次弓鉄炮ノ頭扨旗本馬廻組小性組
跡備ハ関忠五郎何モ備押ヲし太鼓如此
候しヲ正宗虚病ニ付テ五手六手七手三
與ヲ跡備ニ置関ヲ三與ノ跡ハ入替ヲル
業田退治記云秀吉聞之早速馳向江北先
手之備定殿々中暑十三番中川瀬兵衛尉清
秀此次秀吉馬廻也先手鉄炮衆以上八首

右手眤迫之歴々也尤手小性衆究竟之勇
者也
太閤記云解国中之軍人数脇条四万三百人内傷亡六
組之内百人小性衆六組
清須分限帳云御小性組千五百石原田右
衛門千石小笠原左京五百石牧野左京三
百石佐々日根之亟二百石後藤庄三郎余六
十一人略

山本豊久私記云 大坂城中ニ南条中務少輔ト
云者御小性組ニテ居タリシカ寄手ヘ内
通ノ事アラワシ傾テ切腹仰付ラレ相果
ル

奥羽永慶軍記云 蒲生伊達攻 大崎一揆条 今度出陣ニ
八一陣蒲生源左衛門尉二陣同四郎兵衛
尉中 八陣小性與九陣馬廻
又 見聞雑録云 氏真心得有ル馬ヲ出係石
高家ハ百ツヽ日比蔵者ハ拾與ノ如ク
云ヘ大分ハ家ヲ立ル〻ヲ以テ敷所武具
等ヲ調著稱リ対更ハ小性組二組ヲ去年
中ニ稱ハ松平元軍ヲ成ル附物組物
組ヲ二百人ノ内小性ヲ二組ニ物ヲ〻不
殊物ヲ物ヲ立ヲ〻ヲ多ク作ヲ皆〻
物〻ハ馬ノ生ヲ宗氏国ヲ立ル不立ル所本
牛馬ヲ武者二ヨリ余ヲ出陣也

松原自休手録云元和元年五月七日公ノ
魁天王寺表ハ越前羽林大樹魁兵岡山表
ハ加賀ノ太守兼テ左右後備隨之城兵天
王寺表備真田左衛門佐并御宿越前守等
ハ茶磨山ノ南中署小性組ハ立後備岡山表
大野主馬張陣秀頼卿ノ馬印津川左近兼
テ出此表ハ
按ニ小性組ハ慶長御手当の左右ハ
慶長御手当ハ人数ハ或ハ通組ハ
如有ハ通組ハ
ハ小性組ハ通組ハ
大小性組頭
大小性組
如藤清正帳云大小性組一番組四百十石
梅原之覚帳ニ四百十石ハ五井三合加茂与百

大番衆石川外記井上少原吾下
書

中小性頭

里見義安自限帳云享禄年石川五郎兵衛中。
小性頭

平塞録云寛永十年二月廿八日町熊之助
ハ昨廿七日ニモツヨリハタラキ今日モ
ヨク働ケル佐渡手ノ中小性頭津田三十
郎ハ組ノ中小性ヲ帥テ昨日モ相ハタラ
キ今朝津田一組一番ニ柵ヲ越テ攻入ケ
ル

奥小性

山本豊久私記云御本丸ニテ詮議今日ノ
様子定テ市正（片桐）不審ヲ立覚悟ナキ事有マ
シ明日ハ城ヘモ出サルヘシ御大事也如
何アラシト何モ分別ニ余ル（中略）五更ノ天
モ明タシハ秀頼公奥御小性土岐庄五郎

ヲ御使トシテ御自筆ノ御書ヲ成下サル
市正難有頂戴シテ吾心底ヲ庄五郎ニ語
云々

中小性

里見義安ヲ限帳ニ百俵中小性ト人ニ俵
歩ヲ荒五十人

武林雜話ニ市正様ヲ中林豊後ヲ本田善兵衛ヲ
本田善兵衛ヲ中林豊後ヲ
ヲ新参ヲ人ヲ御ヲ人ヲ

奉行ヲ食今ノ中小性ヲ伝ノ者ニ人ヲ
年ニ二十二ヲ可成我律儀ヲ
勤ル間ハ知リ可申ト諸人思ヒ
慶長(四十一ウ)年間禄ニ高長十七年二成吾御ニ元
高ヲ百助ヲ中ニ
ツヲ中也(中器)ヲ大久保石見ヲ目代ヲ大久保
信濃ヲ申者信ヲ元ニ石信ハ弘ヲ天性無者
里ニ入ヲ不対ヲ決断ヲ達

[illegible]侍お角[illegible]をあはれ[illegible]
[illegible]
たり

難波戰記云 忠輝卿遠流条 元和二年七月十二日
黄昏ニ及ヒ忠輝卿江戸ヲ發シ玉ヲ相從
御家ヶニハ寵臣柾木左京亮中略中小性歩
行輩十二人是將軍家ヨリ御免シニテ扈
從シケリ

小十人頭

增補家忠日記云 天正十年十二月十二日
下今度大神君ノ幕下ニ屬スル甲信兩國
ノ諸士等自今以後忠信ヲ盡スヘキノ旨
遠州秋葉寺ニ於テ各連書ノ起請文ヲ書
シメ玉フ中略 萩原甚之丞窪田助之丞因藤
左衛門中村藤六郎石坂藤兵衛志村又左
衛門山本総右衛門河野傳之丞以上是ヲ

小十人頭ト云

江城年録云寛永三年三月十一日臣従替
ニ付小十人ニ為被仰付

加年録小十人ニ仰付九年四月八日ニ仰付
後人小十人ニ番被ちやをしをしの荘少衆
年吉八月十八日落合少年次田中市郎右衛門
小十人番ニ仰付十年八月十二日少林新
年小十人番ニ仰付

小十人

土屋知貞私記云慶長十九甲寅年大坂御
陣之節御供御先中出頭衆御奏者番御小
性御給仕番御小十人組中略

江城年録云寛永三年九月後河内殿
ゟ御書被下候由被仰ニ九月十二日晩
京ニ而ニ成道中ニ供ニ而ニ成
矢崎ニ郎八寺本孫七郎ニ者小十人ニ

元寛日記云寛永九年十一月豊島刑部殿
中ニテ井上主計頭ヲ突殺ス時ニ小従人
組青木小右衛門組豊島持タル脇指ヲ逆
手ニ取直シ突シトシケルカ脚カ思慮有
脇ニテ世悴々々可放ト云フ此間ニ御番
衆脇指ヲ拔是ヲ斬ル下略

扨中小性ト云ハ歩行者ニ歩行者ハ一人ニ
付中ニ徒侍一人ニ付四
人ヲ四五日ヲ江戸詰ニ勤ル者ト云
ハ又唐傘ヲ差シテ徒侍ヲ
ツレタリシ文字ヲ書ケル者ヲ
唐傘ト云ハ元ヨリ常ニ
揚馬ヲ小性ニ云ヲ小性ハ歩行小性ト云
ヲ小性ハ古ハ是ヲ唐傘ト云ヲ
ヲ中小性ト云ハ少人ヲ稱小性ヲ

かゝることを常行流と称せり　あるそれ　常り
流れ　ことを　中を　と　ものをもつて　さとる　者
あり　後の世　常り　常り　少性　とりひろく　立行
得て　勤仕する　家　なり　物　捕　家忠　記
は　去年　すでに　山十人の　名あり
記
郎　あれ　と　手　ひき　野　走　流　と　いひ
彼　来　り　甲陽軍鑑　慶長　記　そ　り
去　る　去　去　山十人の　名　国　に　あ　り　の

あるべけ　見　と　九　流　常　性　と　ふ　名　性
去　中　中　れ　い　走　流　の　ら　を　河　の　山　性　人　と　あ　と
中　あ　て　と　あ　ま　も　去　け　ん　と　を　後　の　世　な
四　ひ　合　と　く　の　郎　と　は　去　記　れ　て　ま　す　あ　る
て　て　去　り　山　な　る　後　の　附
走　流　の　二　号　あ　り　号　刺　後　の　と　き　走　流　な　二　号
あ　な　河　と　の　る　て　こ　き　い　ま　と　り　の　四　流　人　と　文
あ　と　名　奥　を　ら　れ　て　こ　と　人　の　郎　去　ま　く　い　流　性　の　ま　く
と　常　り　流　と　な　る　ま　け　ら　る　ま　け　ら　る　ま　け　て　去　る　と　あ　る　の　流　二　ま　り　後　の　世　な　中　中　性　と

歩小性

小畠景憲家傳云[illegible]
景憲ニ下ル三人ニ[illegible]
[illegible]又子門西[illegible]
[illegible]歩小性[illegible]
[illegible]

六四九
伊達日記云天正十六年三月十二三日比

我等抱ノ地玉ノ丹高玉ヨリ山キハニ付
テ西原ト申候中暑高玉太郎左衛門西陣間
ヲ乗候處ニ志賀三郎ト申モノ我等歩小
性兼テ鉄炮ヲ能ウチ甲候カ川柳ニ鉄炮
ヲ打カケ相待候處ニ太郎左衛門小川ヲ
隔横ニ乗返候處ヲ二ツ玉ニテ打候

五
武藤義信云[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

武家名目抄稿第九冊

国立公文書館
National Archives of Japan

明治十六年二月　旧稿校正　小野　由久

同年　同月八日再校并書　日下部利博

同　十七年七月　校　佐々木又右衛門

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan